

第75回全国中学校・高等学校ダンスコンクール 総評

ダンスコンクール審査委員長 坂本秀子

今年もたくさんの力作に出会うことができました。参加作品数は、高校グループ作品 35 作品、ソロ・デュオ 14 作品、中学 25 作品でした。どの作品も思考錯誤を重ねて振付し、力の限り踊りこまれたのだらうと推察できました。

今回、審査を担当された先生方の感想をこのウェブサイト上でお伝えいたしますので、今後の参考にしていただければ幸いです。また、個々の作品に対する講評は別途お届けすることになっておりますので、楽しみにお待ちください。

◎審査の観点について

審査員は、「身体がよく訓練され、鍛えられているか」「主題にふさわしい表現が行われているか」「作品の展開・構成に工夫が見られるか」「作品全体が独創性にあふれ、何らかの魅力があるか」「総合的な完成度の高さ」の5つの観点で評価をしています。

どの部門にも共通することですが、ダンスコンクールにエントリーするということは、他作品との比較になるわけですから、なるべく他の人がやらないことをやる、つまり独自性を持つことが大切です。これは、なかなか難しいことだと思いますが、是非忘れないようにしてください。また、鑑賞者に共感してもらわなくては感動は得られないので、時々振り返りながら、独りよがりの表現になっていないかをチェックすることも重要だと思います。以下は部門ごとのアドバイスです。

◎中学校の部

- ・中学生とは思えないくらい、よく訓練された身体と表現力に感心しました。しかし、油断をすると身体はすぐ基礎を忘れてしまうので、今後もしっかり基礎訓練を行ってください。
- ・定番のテクニック、パターン化された動きだけではなく、テーマに即した自分たちだけの動きがあるかを常に見直してください。それが作品の命となります。
- ・使用曲の選曲の幅が狭く、似たり寄ったりの感じがしたというご意見もありました。作品にとって本当にふさわしい曲を選び抜くために、また音楽の編集に関しても学んでいく必要があると感じます。日頃から、音楽にも興味を持って自分たちが触発されるような音楽に出合えると良いですね。
- ・作品のイメージをたくさん膨らませてダイナミックに踊ること、また、細かい表現にも心を砕いて今後も頑張ってください。

◎高等学校の部

- ・テーマの掘り下げ方を拝見しますと、高校生としての自立した意思を感じました。表現がうわべのものではなく、心から表出されていたように感じます。中には4分では語れないような重いテーマに取り組み、苦労されたグループもあったように見受けられました。指導の先生とよく相談して、テーマを決定してください。
- ・独自の動きの重要性については述べてきましたが、新しい動きを考案することは時に苦しみも伴います。しかし、辛抱強く戦い自分達だけの動きを生み出すことこそ、創作作品の醍醐味です。諦めずに時間をかけて戦ってください。
- ・衣裳についてはかなり工夫されていて感心しましたが、動きの途中で着崩れてしまったり見せたくない部分が見えてしまったり、、、。衣裳も動きの一部としてとらえ、効果的に見えるか否かチェックをしてください。

◎ソロ・デュオ部門

- ・大変よく鍛えられた身体で、ダイナミックかつ微細な表現までこなしていて、とても見ごたえがありました。ただ、テクニックばかりが先行してしまうと心情が置き去りにされてしまうので注意が必要です。
- ・テーマの選び方については、最も自分に合ったものを選ぶことが重要です。日頃の練習では様々な表現を学び、コンクール作品では「絶対、人がまねできない表現」を目指す必要があります。特に少人数作品ではこれがポイントになります。
- ・同じ動きでも呼吸の使い方や、間の取り方で振付は、どんどん成長します。満足することなく、追及する姿勢を忘れないで下さい。

◎終わりに

来年もまた、お目にかかれることを楽しみにしています。元気で力を蓄えてお会いしましょう。

決選審査員一覧

- ◎坂本 秀子（日本女子体育大学教授）
- 松澤 慶信（日本女子体育大学教授）
- 浅野 淳（音楽家／舞踊ライター）
- 西川箕乃助（日本舞踊協会常任理事）
- 中村 恩恵（舞踊家）
- 松山 善弘（日本女子体育大学教授）
- 港 ゆりか（振付家）
- 宮本 乙女（日本女子体育大学教授）